

(別紙2)

## 審査の結果の要旨

氏名 平沢 慎也

本論文は、英語前置詞 **by** の諸用法を統一的な観点から詳細かつ緻密に分析したものである。現代英語の母語話者がこの前置詞を適切に使用することを可能にしている知識とは何かを解明することを目指して行われた本論文の分析は(認知言語学において多数提案されてきたものも含む) 従来の分析とは、理論的にも実証的にも、大きく異なるが、その目標は十分に達成されていると思われ、今後の英語前置詞研究のあるべき一つの方向性を明確に例示する優れた成果であると言える。

平沢氏の構想する英語前置詞の分析の最大の特徴は、従来の認知言語学的な研究において前置詞単体の〈意味〉のカテゴリー化とされていたものを前置詞の〈使用〉のカテゴリー化として捉え直すところにある。すなわち、似ているからという理由でひとまとめにして記憶されるのは、前置詞単体の〈意味〉ではなくて、当該前置詞の〈使用〉であるとされる。これは多義論から多使用論へのパラダイムシフトを意味する。その具体的な在り方を前置詞 **by** を例にとって示そうとしたのが本論文である。

従来の(とりわけ認知言語学における)前置詞の多義研究の暗黙の前提になっていた意味の「水源地モデル」との対比で、本論文の分析が依って立つ使用基盤 (**usage-based**) モデルを提示する第1章に続いて、第2章から第5章の前半にかけて、**by** の様々な用法(時間、空間、手段、差分・単位)が詳細にかつ見通しよく記述される。これにより、**by** のある用法 A から別の用法 B の振る舞いが正確に予測できることが非常に少ないことが明らかにされる。用法 A を知っているけれども用法 B を知らない人が、用法 A と用法 B のつながりを教えられても、それによって用法 B を正しく使えるようになることはまずないのである。**by** の用法 B を母語話者として適切に使用するためには、用法 B の振る舞いを細部まで記憶するほかないことになる。

ただし、使用基盤モデル(およびそれに基づく多使用論)の妥当性を示すためには、このモデルが言語使用の革新的な側面とも矛盾しないことが必要である。いかなる言語の話者も、標準的な言語使用や頻度の高い表現から外れた目新しい表現を、使ったり理解したりすることがしばしばあるからである。このような場合には、新奇な表現と聞き慣れ使い慣れた標準的な表現との関連性が決定的に重要になる。そのような関連性があるからこそ、新奇な表現を他の母語話者に理解可能な仕方で使用することができると考えられるからである。以上の論点を例示するのが本論文第5章の後半である。

著者自身が第6章 結語で述べているように、本論文をもってしても **by** の用法の全体像を提示するには至っていない。しかし、この前置詞のこれだけ多様な用法を統一的な視点からこれほど詳細に、見通しよく、また正確に分析しえた論考は世界的にも例がなく、本論文が英語の前置詞研究と認知言語学という理論に大きく貢献する成果を提示しえていることは間違いない。

よって、本審査委員会は本論文が博士(文学)の学位に値するものとの結論に達した。